

国際開発ゼミ紹介：

同志社大学政策学部政策学科：岡本由美子ゼミ

わが国の大学の革新的な研究と教育の最前線の動向を読者に紹介するシリーズの新たな試みとして、開発途上国において、ユニークな海外研修を実施している「国際開発ゼミ」をご紹介します。第三回は同志社大学です。

(本稿は同志社大学政策学部政策学科の岡本由美子教授に執筆していただいた。)

ゼミ教官名	岡本由美子（国際経済、国際開発）
教育科目の名称	演習Ⅱ、演習Ⅲ、及び、フィールドリサーチ
学生の学年構成と人数	2～4年生。毎年、15名から17名が参加。
海外研修に教官の同伴の有無	教員の同伴は必須。
海外研修参加者の人数と必修か否か	毎年3年次生が海外研修に従事。15名から17名。必須とはしないが、ほぼ全員参加。
訪問する途上国の数	1国
海外研修の期間	15日間
学生一人の平均費用	30万から35万円
大学からの財政支援の有無と有の場合の金額	有。渡航費補助がほぼ10万円。

1. 海外研修の目的

アフリカのウガンダを例にとり、途上国の持続可能な開発のあり方とそのプロセスにおける国際・民際協力の重要性を探ることを目的に海外フィールドワーク（FW）を行っています。2020年度、21年度は残念ながら実際に現地を訪問することは可能ではないですが、現地の関係団体とネットで何度か回線を繋ぎ、海外FWを行っています。

2. 海外研修の特徴・ユニークさ

まず、アフリカで海外FWに従事している点です。2017年度からアフリカのウガンダで海外FWを行い始めてからすでに4年が経過しましたが、就職活動を終えた学生から、このユニークさが学生の就職に有利に働くと聞いています。また、昨年度はオンライン海外FWとなってしまいましたが、実際現地に行かずとも、海外とのやり取りを継続できたこともまた、評価の対象となったとの意見を学生から聞いています。国際・民際協力人材の需要が一般企業にまで広がっていることが伺われます。

第二に、新しい国際・民際協力のあり方を模索している点です。これからの国際・民際協力は、すべてをデジタルで代替は不可能であるにしても、物理的に現地に行かずとも如何にして協力を持続させるか、その力も求められています。教材のデジタル化がその一例です。いち早くその動きを取り入れて、現在、ゼミの活動を行っています。

第三に、ゼミ活動において日本の身近な例も取り上げ国際協力に繋げることにより、アフリカの持続可能な開発の問題を特殊な問題とせず、日本の問題・課題を考える際にも非常に役に立つことを強調している点です。アフリカで海外 FW を行う前に必ず、今や「持続可能なまちづくり」の成功例として世界的に有名になった徳島県の上勝町を訪問します。

3. 海外研修計画の策定方法

海外 FW は、演習 II (ゼミ 3 年次春学期) に事前準備を行います。まず最初に、座学やゲストスピーカーを招聘して、ウガンダの基本的な政治・経済・社会について学びます。

第二に、日本の開発コンサルタントの協力を得て、プロジェクト・サイクル・マネジメント (PCM) を学びます。これによって、プロジェクトの計画立案及びモニタリング・評価のプロセスを体感します。

第三に、テーマ毎に班を結成し、それぞれの班で、①誰のどのような問題・課題に取り組むか、②その目的は何か、③それを達成するためにどのような活動を行うのか、④期待されるインパクトは何か、⑤具体的な達成目標は何か、を決めます。

第四に、夏休み最後に、海外 FW を実施し、現地で、又は、オンライン上で、それぞれの班の具体的な活動を実施します。

第五に、演習 III (3 年次秋学期) において、海外 FW の成果を報告書にまとめるとともに、成果報告会を開催します。国際協力の専門家からコメントを頂く一方、広く一般にその成果を報告するように努めています。

第六に、最後に反省会を開催し、どのような点が上手くいき、どのような点が当初計画していた通りの成果があげられなかったのか、明らかにします。その上で、海外 FW の活動を 2 年ゼミ生に引き継いでいきます。

4. 研修・研究テーマの策定とチームの編成方法

テーマは毎年少しずつ状況に応じて変わります。国内外の関連団体からどれだけ協力が得られるか、によって変化します。ここ数年は、次の 4 つのテーマに分かれて活動を行っています。第 1 番目は、北部ウガンダで行われている JICA の技術協力プロジェクト (北部ウガンダ生計向上プロジェクト: NUFLIP) サイトを訪問させていただきながら、現在、JICA がアフリカでも力を入れている、小規模農家所得向上を目指した市場志向型農業振興アプローチ (SHEP アプローチ) の評価を行っています。第 2 番目は、東部ウガンダの品質の高いコーヒー産地で認証型フェアトレードに取り組む小規模農家組合を訪問し、フェアトレードの問題・課題を探り、その解決策を探っています。第 3 番目は、自然豊かなウガンダの環境保全を目的としてエコツーリズム振興に取り組む現地 NGO が抱える問題・課題を明らかにし、現地に協力しながらその問題解決にあたるものです。第 4 番目は、東アフリカの数多くの大統領を輩出しているマケレレ大学の学生さんたちと研究交流会を行います。2021 年度のテーマは、“Impacts of COVID-19 on the Livelihood

of Japanese Women: Lessons to Learn from NUFLIP in Promoting the Japanese Gender Equality” です。今年度はアフリカのウガンダを事例に取りながら、日本のジェンダーの不平等度の解決に向けたヒントを探り出すことが目的です。

チーム編成は基本的には学生の主体性に任せます。今年度は教員が一切介入せず、学生の主体性に任せた結果、チーム毎に人数にバラツキが出てしまいました。来年度以降の課題です。

5. 研修・研究の方法論の策定

FWの方法論として、佐藤郁哉(2006)『フィールドワーク増訂版：書を持って街に出よう』(新曜社)を参考にしています。FWには大きく分けて2つのアプローチがあります。定性的調査と定量的調査です。私はどちらか一方に固執せず、両方のタイプから得られる情報を戦略的に組み合わせることによって、より妥当性が高い分析を目指しています。ただし、どれほど定量的調査が行えるかは、受講生の統計分析力に大きく依存します。昨今、国際開発・協力の分野では、社会的インパクト評価が主流になりつつあり、統計学の知識が益々求められています。ゼミのみならず学部全体の大きな問題・課題の一つになっています。

6. 海外研修の段取りと手配の仕方

航空チケットの手配は、団体予約が必要となるため、以前からお世話になっている旅行代理店にその年の1月から2月にかけて依頼をしています。現地での面談の設定は、岡本が行うことが基本ですが、JICA Uganda と NUFLIP サイト訪問に関しては、その窓口となっている JICA 関西、及び、NUFLIPを実施している日本の開発コンサルタント企業にお願いしています。

7. 現地での研修・研究の課題等

最大の問題は、健康管理面です。ただし、2017年度から19年度の3年間のウガンダにおける海外FWの経験からしますと、学生が現地で病気を発生するかどうかは、かなり、学生間のチームワークの良さにかかっていると思われます。ウガンダは赤道直下ではありますが、高原に位置するため、年間を通じて非常に涼しく、マラリア対策をしっかりとしていれば、病気にかかることは滅多にありません。それにもかかわらず、年によって、ばらつきがあります。個人差もちろんありますが、学生間のチームワーク力がかかり現地での病気の発生度合いとその深刻さに関係すると思われます。

8. 研修・研究の成果

年によってバラツキがありますが、第1の成果は、アフリカの圧倒的な大地の自然に魅了され、環境保全と経済発展の両立の重要性に気付かされることだと思います。アフリカから日本に留学している学生さんは実はその事に気が付いていないことも多々あります。アフリカ人にとっては大自然が当たり前のことであり、そこに重要な価値をあまり見出していない傾向にあります。逆に日本人の若い世代は開発された後の都市生活しか知らない場合が多々あり(場合によっては、日本の農村も訪問した経験がない学生もいます)、環境と開発のバランスの重要性に気が付く傾向にあります。

第二に、世界銀行の統計でいうところの「絶対的貧困」とは一体どういうことなのか、現地を訪問することで肌感覚をつかめるところでしょう。北部ウガンダで起こってしまった内戦の爪痕がまだ残っている地域の貧困や良質のコーヒーを生産、輸出しているにも関わらず相変わらず持続する小規模コーヒー農家の貧困等に直に触れ、SDGsの目標1の「貧困撲滅」の重要性をより深く理解するようになってきていると思われま

第三に、どんな小さなことでも、自ら打ち出した解決策が現地で実際に採用されたり、現地の人々の意識の変革をもたらした時、学生が最も喜びを感じ、達成感を感じます。それが、ゼミ生の自信とその後の人間的な成長の源泉にもなっていると感じます。逆に、海外FWの前の分析の詰めが甘いと現地側からポジティブなコメントが得られず、学生は意気消沈します。教員側からすれば、「詰めの甘さ」の原因が特定できればそれでいいとは思いますが、学生の満足度が上がらず、困ってしまうこともあります。

以下、写真を通して、海外FWの一部を簡単に紹介します。



写真① マケレレ大学での研究交流会の様子

写真①は、マケレレ大学の開発部の先生と学生さんとの研究交流会風景です。英語でプレゼンをするのは学生にとってはハードルが高いですが、毎年、ウガンダの大学の学生さんとの交流で大いに刺激をもらっています。中には、それ以降も、交流が続いている学生さんもいます。



写真②北部ウガンダのJICAプロジェクトの視察

写真②は、貧困率がまだ70パーセントと非常に高い北部ウガンダで行われているJICAのプロジェクト (NUFLIP) の様子です。JICAは現在、コロナ禍で遠隔から行える国際協力を模索していますが、本プロジェクトも例外ではありません。当分、以前のように専門家が派遣されず、我々は、教材づくりで本JICAプロジェクトに何らかの形で協力できないか、模索中です。



写真③女性コーヒー農家さんでのインタビュー

写真③は、フェアトレードが途上国の小規模農家さんにどのような影響をもたらしているのか、探っているところです。本組合が特に力を入れている女性小規模有機コーヒー農家さんを訪問し、学生が色々と質問しています。岡本ゼミは翌年3月、京都市主催のコーヒー・トーク・イベントに招待され、岡本とコーヒー一班5人のゼミ生が30分間、途上国におけるフェアトレードの重要性についてお話しさせていただきました。



写真④京都市主催のコーヒートークイベントに招待されました。

その様子はインターネットで全国に配信され、また、その様子は京都市のアーカイブにも保存されました(写真④)。聴衆者から質問も出て、ゼミ生も学んだことの成果を実社会に還元でき、感激していました。

海外FWは教員の負担が大きすぎる割りに学内での理解が得られず、途中、何度も断念することを考えました。しかし、海外FW後の学生の満足度の高さやその後の人間的成長を見ることの楽しさが唯一、長きにわたって海外FWを続けてきた理由です。